【研究ノート】糸島系大壺考

ー長崎県平戸市里田原遺跡の通称「荻の下地区弥生墓地」のカメ棺に寄せてー

古門 雅高

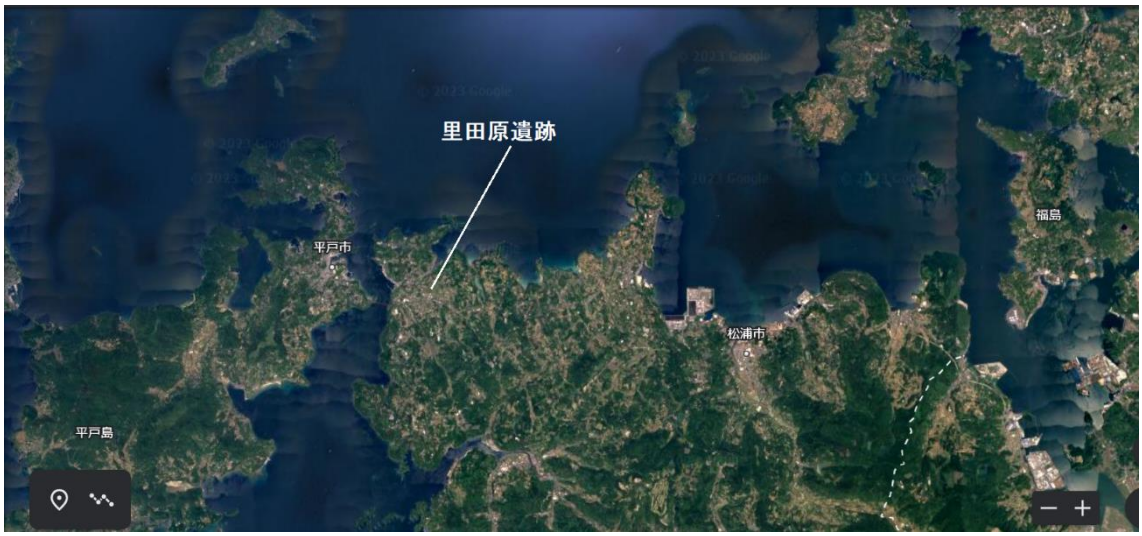
はじめに

令和４（2022）年３月に刊行された『西海考古』第 12 号誌上で宮﨑貴夫氏が「在地壺と搬入された甕棺・大甕・大壺の検討ー弥生時代後期の長崎県本土地域を中心としてー」という論攷を発表された（宮﨑 2022）。その中で氏は弥生後期に本県に流入した外来の甕と壺にそれぞれ「筑紫系大甕」「糸島系大壺」の形式名を冠することを提唱している。ただし、これらの土器がひとつの系統の中で安定した形式として成立しているのかという点については今後さらなる検証が必要である。筆者は今のところ「筑紫系大甕」より「糸島系大壺」の方が分布や型式組列が明らかになりつつあるため、より安定した形式であるとの印象をいだいている。さらに副題に掲げた平戸市里田原遺跡の通称「荻の下地区弥生墓地」で出土したカメ棺がまさに「糸島系大壺」であることから、まずは同大壺の検討をすべく本稿を執筆した（註１）。

第１図　里田原遺跡の位置図①

１　平戸市里田原遺跡の「荻の下地区弥生墓地」について

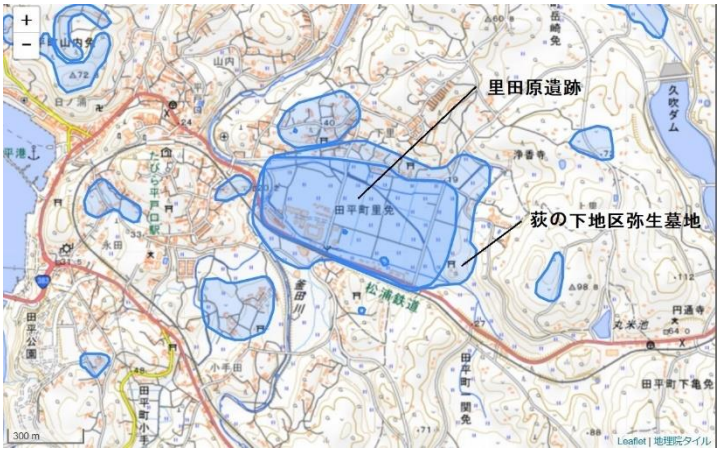
糸島系大壺の検討の前に同大壺を用いたカメ棺が出土した平戸市里田原遺跡の通称「荻の下地区弥生墓地」の概略を述べる。



第２図　里田原遺跡の位置図②（グーグルアースより）

（1）西の登呂遺跡

平戸市の里田原遺跡は本県北部の旧田平町に位置し、1972（昭和47）年7月に国道沿いの造成工事現場から弥生土器と木製品が出土したことから、当地が遺跡であることが認識された。その後の発掘調査によって大量の木製品が出土したため世に知られることになり、当時は「西の登呂」とまで称された遺跡である。



第3図 里田原遺跡位置図3（長崎県遺跡地図web版より）S=1/30,000

本稿でとりあげる「荻の下地区弥生墓地」は同遺跡の東南にあり（第3図）、2000（平成12）年には全国で12面しか出土していない多鈕細文鏡が発見されたことで（註2）、里田原遺跡は再び注目を浴びることになった。

しかしながら2003年に田平町教育委員会から刊行された同墓地の発掘調査報告書では調査成果の一部しか報告されなかったため、墓地の全体像が分かりにくくなっている（田平町教委編2003）。現在、多鈕細文鏡は県指定の有形文化財に指定され、同鏡以外の遺物は平戸市の有形文化財に指定されているが、一般にはほとんど知られていない。報告書刊行から20年が経過し、その間、国史跡指定の話も浮上したが実現していない（註3）。今や当時の関係者はいなくなり、その機運もない。遺跡の重要性からみて県指定史跡に甘んじている現状は決して満足できるものではないが、将来を見据え、公表されている限られた情報を整理し、同遺跡の理解や周知をさらに進めていかなければならないと考える。

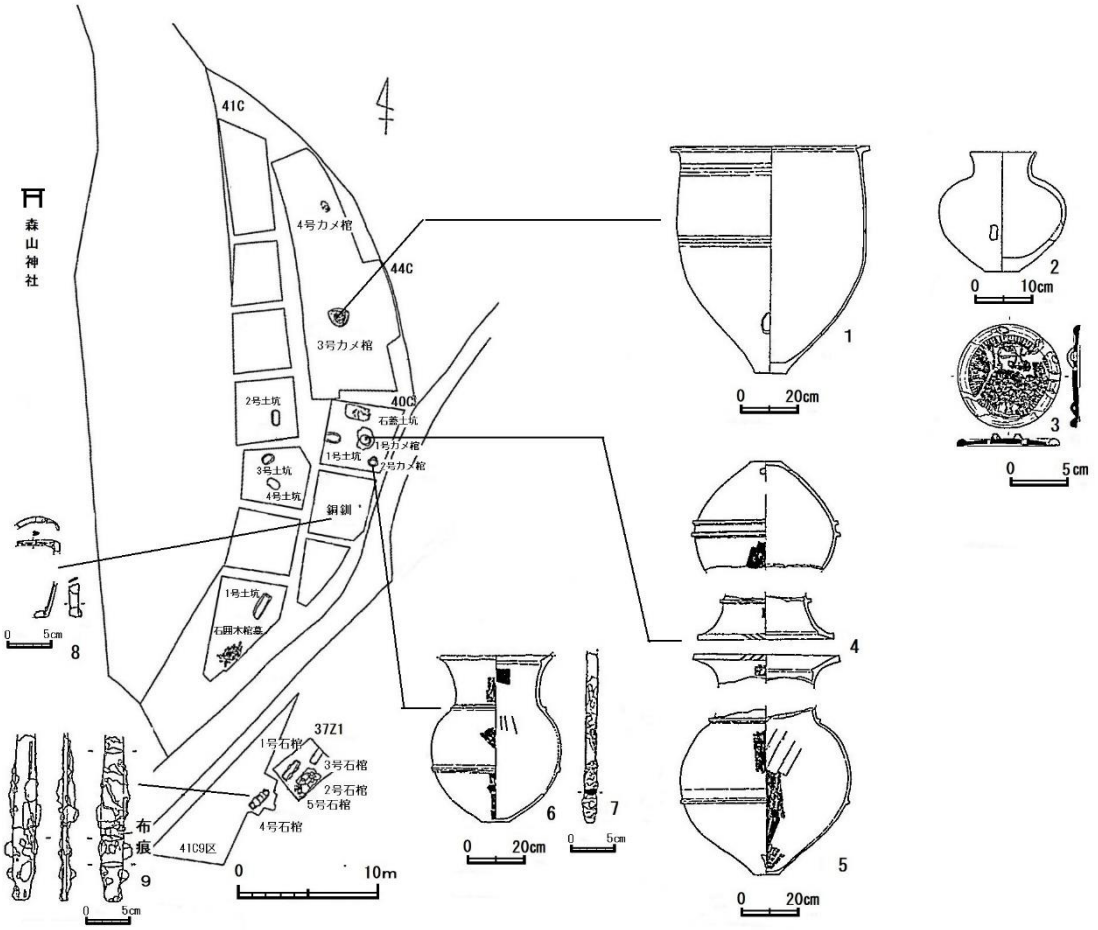
（2）荻の下地区弥生墓地の遺構と遺物（第4図）

第4図は「荻の下地区弥生墓地」の遺構配置図である。等高線が記載されていないので、地形の起伏は不明である。3号カメ棺墓とされている遺構に多鈕細文鏡と城ノ越式の小形壺が副葬されており、これらの副葬品からカメ棺の時期は弥生時代中期初頭であることが分かる。3号カメ棺は単棺ではあるが、北部九州系の大形成人用甕棺であり、橋口編年のKⅡaに併行する型式である。そのため、ここからは「3号甕棺」と表記する。3号甕棺の半径6～7mの円内にその他の埋葬遺構は存在せず、同棺は墓標の存在があったのか、少なくとも弥生後期まではその存在が知られていた可能性がある。なぜなら同棺を取り囲むように弥生後期のカメ棺群が存在するからである。

これらのカメ棺のうち1号と2号のカメ棺が糸島系大壺の範疇に入る土器である（第4図4,5,6）。2号カメ棺には鉄製ヤリガンナとガラス製小玉が副葬されていた。

なお、1号カメ棺には集石が伴っていたことが報告されており、墓標と思われる。

またカメ棺群の南東からは銅釧が出土している。この銅釧はイモガイの貝輪を模倣したと言われており、同様のものは佐賀県唐津市の中原遺跡と本県佐世保市門前遺跡から出土している。いわ



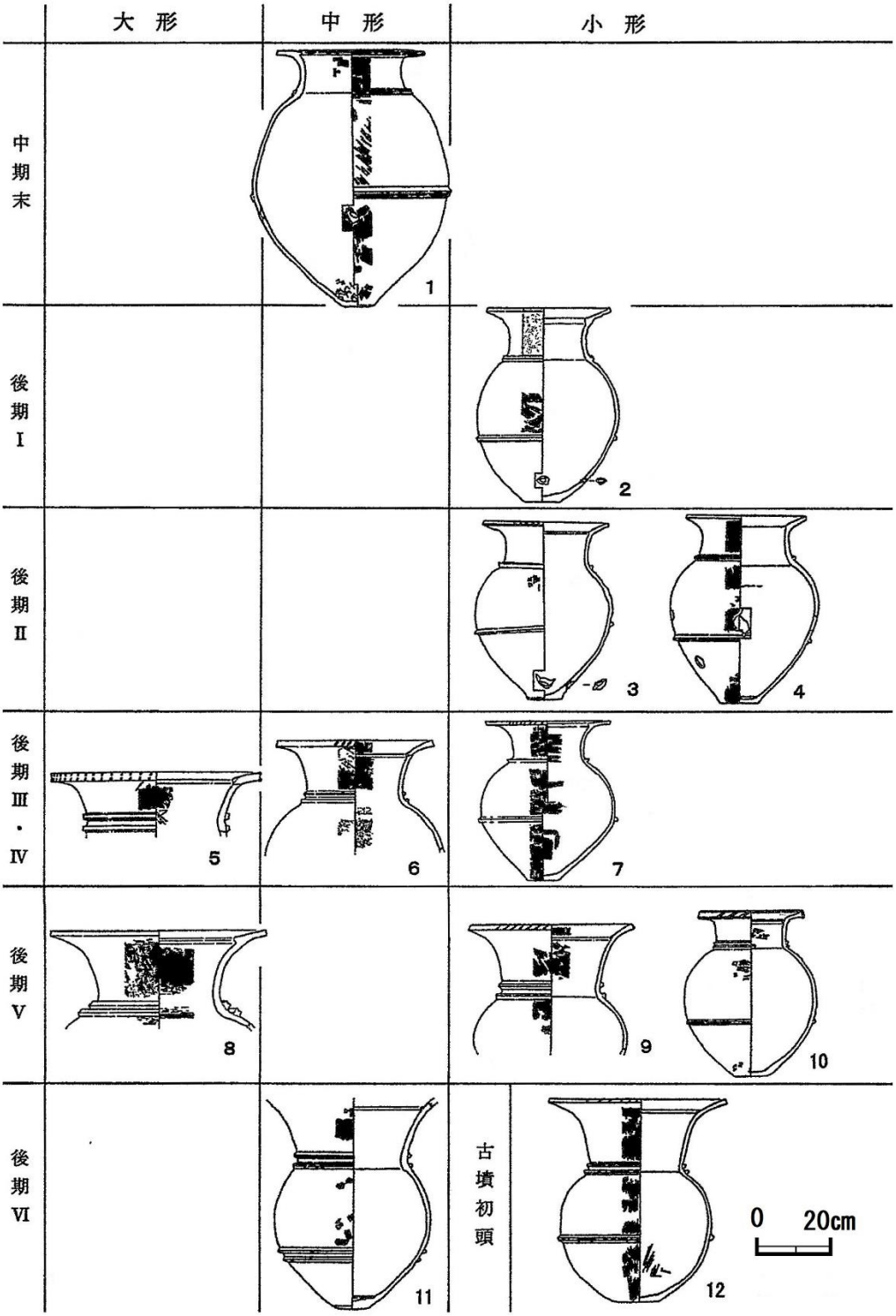
第４図　里田原遺跡　「荻の下地区弥生墓地」遺構配置図および副葬品　田平町教委編 2003 を改変
遺構配置図:S=1/500、遺物 No1,4,5,6:S=1/30、同 No2:S=1/15、同 No7,8,9:S=1/8、遺物 No3:1/6

ゆる末盧国との関係を彷彿とさせる遺物である。さらにカメ棺群の南に１号土坑と石囲木棺墓なる遺構が発見されているが、いずれも未報告である。また、これらの墳墓群のさらに南に 41C9 区と 37Z1 の調査区があり、ここには主軸を同じくする石棺群が存在する。そのうちの４号石棺には鉄剣が副葬されていたが、この石棺群の実測図も発掘調査報告書に掲載されていない。

２　糸島系大壺の研究史

宮﨑によると糸島系大壺なる土器形式の提唱は、氏が 2000（平成 12）年の長崎県考古学会で「糸島系土器壺」として口頭発表をしたのが最初であった（宮﨑 2022）。続いて 2015（平成 27）年に長崎県考古学会と九州考古学会の合同研究大会の場で「糸島系大壺」と呼称を変えて口頭発表したという（宮﨑前掲）。しかしその後、「糸島系大壺」の形式や呼称は一般に定着することなく現在に至っている。

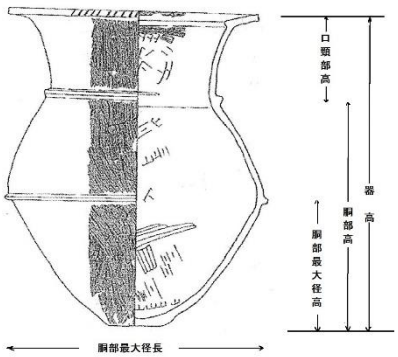
2020（令和 2）年に寺田正剛が長崎県埋蔵文化財センターの紀要に「松浦市太田遺跡の円形浮文のある大型壺について」という論攷を発表した際にも、この形式の大壺を検討しているが、「糸島系



１原の久保Ｃ２号カメ棺、２大川４号カメ棺、３大川３号カメ棺、４八反ＳＤ５、５・６高元Ｆ区３層、７八反護岸、８～10 原Ａ区２号濠、11 原３号カメ棺、12 不條カメ棺

第５図　宮﨑による糸島系大壺の型式組列と編年（S=1/20）（宮﨑 2022 一部加筆）

大壺」の呼称は用いていない（寺田 2020）。このような状況の中で、宮﨑は先に記したように『西海考古』第 12 号誌上で改めて「この糸島地域を中心とした鋤先形口縁をもつ大形壺を「糸島系大壺」と名づけて検討をおこないたい」と明記し（宮﨑前掲 p27）、自説を展開したわけである。



第 6 図　糸島系大壺の計測

３　糸島系大壺の特徴

次に、この「糸島系大壺」の属性に係る特徴を整理する。宮﨑は同大壺を「糸島地域を中心とした鋤先形口縁をもつ大形壺」（宮﨑 2022 p27）とのみ記している。簡潔ではあるが、土器の範型からは様々な変容形や折衷形が生じるのは当然であるので、形式を設定し、その型式変化を追うためには、型式間に共通した属性の特徴が明らかであることが重要である。

その点、寺田の論攷は参考になる。氏はこの土器の形式を鋤先口縁の大型広口壷と定め、各型式に共通した属性の特徴としては「壺部屈曲部に１条もしくは２条の突帯があることである。ただ、突帯の形状はコの字もしくは三角突帯であり統一性はない。また頸部から口縁部にかけて大きく外反し、その内側には１条の突帯がある。この突帯があることで中期から続く鋤先口縁の形状を残すことになる。また、器面調整は外面が縦方向の刷毛目、内面が横方向の刷毛目でほぼ共通している。」と記している（寺田前掲 p21）。弥生後期の北部九州の壺形土器と言えば複合口縁の壺形土器が一般的であるが、後期になっても弥生中期に盛行した鋤先口縁を好んで用いたことが糸島系大壺の最大の特徴である。

また頸部と同様に胴中央部にも一条ないし二条の突帯をもつことや、底部が平底であることも共通した属性の特徴と言える。

ここで筆者なりに糸島系大壺とその属性の特徴を整理したい。

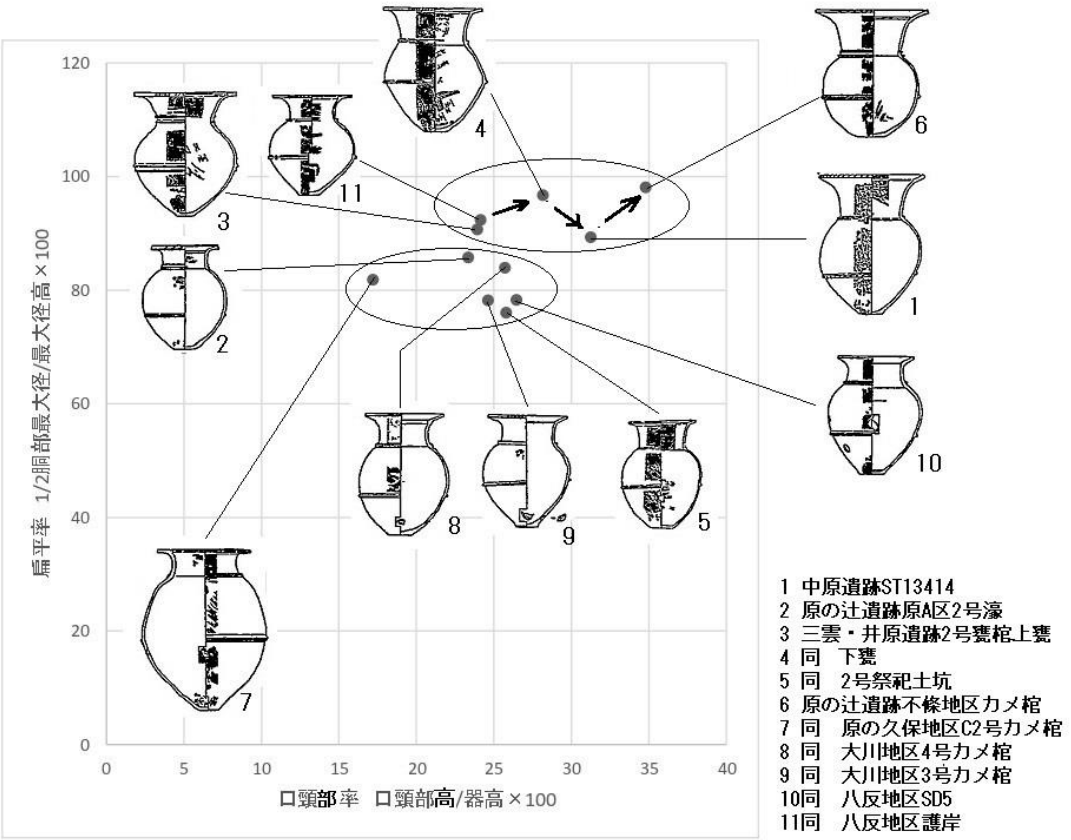
１　形式は鋤先口縁をもつ大形広口壷である。
２　胴部と頸部の境目に一条ないし二条の突帯をもつ
３　胴部にも同様の突帯をもつ。
４　口縁はいわゆる鋤先口縁で、口縁部内面に突帯を有するものが多い。
５　底部は平底である。

４　糸島系大壺の型式組列

第５図は宮﨑が原の辻遺跡出土資料を中心に作成した糸島系大壺の型式組列と編年である。ここからは宮﨑が認定した糸島系大壺に、寺田が認定した資料を加えて、糸島系大壺の型式組列を検討する。

まずは糸島系大壺の各型式がどのような形状をしているか明らかにし、各型式の組列を追うことにする。なお同大壺は大きさによって大中小の３種類があるようだが（宮﨑 2022）、本稿では指数を用いるので考慮していない。

糸島系大壺は口頸部が発達するに伴い、胴部高が高いものから低いものへ移行し、同時に胴部が丸みを帯びる印象を受ける。このような感覚的印象は指数で示すことができるので、藤尾慎一郎の



第７図　糸島系大壺の扁平率（S=1/40）

第１表　糸島系大壺計測値（単位：ｾﾝﾁ）

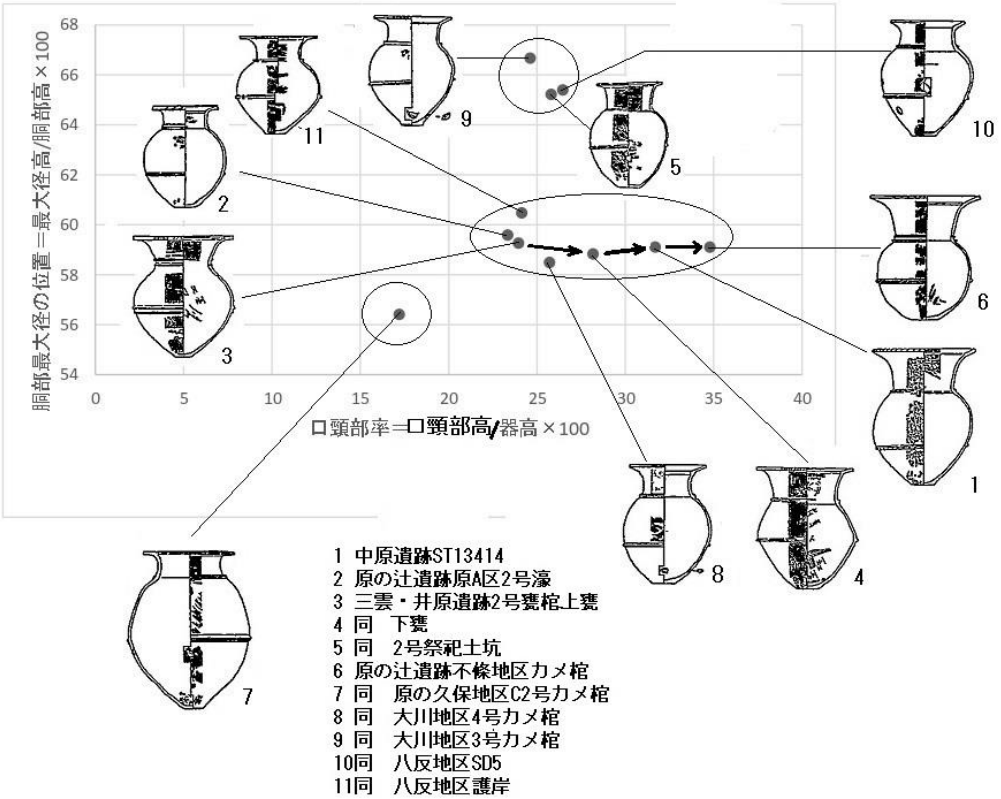
No	遺跡名	遺構名	a（1/2胴部最大径）	b（最大径高）	c（口頸部高）	d（器高）	c/d×100	a/b×100
1	中原遺跡	ST13414	23.2	26	20	64	31.25	89.2308
2	原の辻遺跡	原地区2号濠上層	19.2	22.4	11.2	48	23.3333	85.7143
3	三雲・井原遺跡	2号甕棺上甕	23.2	25.6	13.6	56.8	23.9437	90.625
4	三雲・井原遺跡	2号甕棺下甕	23.2	24	16	56.8	28.169	96.6667
5	三雲・井原遺跡	2号祭祀土坑	18.24	24	12.8	49.6	25.8065	76
6	原の辻遺跡	不条地区甕棺	40.8	41.6	38.4	110.4	34.7826	98.0769
7	原の辻遺跡	原の久保C2号カメ棺	28.8	35.2	12.8	74.4	17.2043	81.8182
8	原の辻遺跡	大川4号カメ棺	20.8	24.8	0.9	3.5	25.7143	83.871
9	原の辻遺跡	大川3号カメ棺	20	25.6	12.8	52	24.6154	78.125
10	原の辻遺跡	八反SD5	21.28	27.2	14.4	54.4	26.4706	78.2353
11	原の辻遺跡	八反護岸	19.2	20.8	11.2	46.4	24.1379	92.3077

論攷「考古学における「かたち」の認識」（藤尾 1993）を参考に散布図を作成した（第７図、第８図）。

口頸部の発達は器高に占める口頸部高の割合である口頸部率（口頸部高÷器高×100）を求めれば明らかとなる。すなわち数値が高いほど口頸部が発達していることを示す。胴部の形状の変化は扁平率（胴部最大径の 1/2÷最大径高×100）で明らかになる。数値が高いほど短胴ないし球形で、低いほど長胴となる。

さらに胴部最大径の位置を見るために、（胴部最大径高÷胴部高×100）の指数を求める。数値が高ければ最大径が胴部の上位にあって，肩が張る器形である。低ければナデ肩である。

第７図はＸ軸に口頸部率、Ｙ軸に扁平率を示した散布図である。口頸部の発達に応じて、長胴の



第８図　糸島系大壺の胴部最大径の位置（S=1/40）

第２表　糸島系大壺計測値②（単位：㎝）

No	遺跡名	遺構名	a（最大径高）	b （胴部高）	c（口頸部高）	d（器高）	c/d×100	a/b×100
1	中原遺跡	ST13414	26	44	20	64	31.25	59.0909
2	原の辻遺跡	原地区2号濠上層	22.4	37.6	11.2	48	23.3333	59.5745
3	三雲・井原遺跡	2号甕棺上甕	25.6	43.2	13.6	56.8	23.9437	59.2593
4	三雲・井原遺跡	2号甕棺下甕	24	40.8	2	7.1	28.169	58.8235
5	三雲・井原遺跡	2号祭祀土坑	24	36.8	12.8	49.6	25.8065	65.2174
6	原の辻遺跡	不条地区甕棺	41.6	70.4	38.4	110.4	34.7826	59.0909
7	原の辻遺跡	原の久保C2号カメ棺	35.2	62.4	12.8	74.4	17.2043	56.4103
8	原の辻遺跡	大川4号カメ棺	24.8	42.4	14.4	56	25.7143	58.4906
9	原の辻遺跡	大川3号カメ棺	25.6	38.4	12.8	52	24.6154	66.6667
10	原の辻遺跡	八反SD5	27.2	41.6	14.4	54.4	26.4706	65.3846
11	原の辻遺跡	八反護岸	20.8	34.4	11.2	46.4	24.1379	60.4651

土器群（2、5、7、8、9、10）と短胴ないし球胴に近い土器群（1、3、4、6、11）が存在する。第８図はX軸に口頸部率、Y軸に胴部最大径の位置を示した散布図である。口頸部の発達に応じて胴部最大径の位置が高い土器群（5、9、10）から低い土器（7）、さらに両者の中間の土器群（1、2、3、4、6、8、11）がある。

したがって両図から判断して、宮﨑や寺田が認定した糸島系大壺には長胴で胴部最大径の位置が低い土器（7）と長胴で胴部最大径の位置が高い土器群（5、9、10）、短胴で胴部最大径が中位の土器群（1、3、4、6、11）、長胴で胴部最大径が中位の土器群（2、8）という１個体と３つの土器群が存在することが分かる。ここでは３つの土器群をそれぞれA群、B群、C群と呼称する。

次にこれらの土器と土器群の新旧関係を検討する。前述のように糸島系大壺は時間の経過とともに口頸部が発達することが想定されるので、第７、８図の７が最も古い型式で、同６が最も新しい

型式と考えられる。したがって時間の経過は両図とも左から右となり、そのため時間を追って型式変化を遂げたのは短胴で胴部最大径が中位のＢ群（1、3、4、6、11）であることが分かる。子細に見ると同群の中でもより古い3、4、11 は胴部が張って菱形を呈するが、それよりも新しい1、6 は胴部の張りが失われ、球形に近くなるという型式変化を遂げている。

第7,8 図で継続的な型式変化が見られなかったＡ群（5、9、10）、Ｃ群（2、8）の土器は、途中で作られなくなったか、型式変化の方向が本稿で予見した「口頸部の発達」とは異なることが考えられる。いずれにしてもＡ、Ｃ両群とＢ群は同一の系譜ではないため、Ｂ群の出現には複合口縁壺形土器など他の形式の土器の影響が及んだ可能性がある。

以上の考察をもとに作成した糸島系大壺の型式組列が第 9 図である。

５　糸島系大壺の編年

次に糸島系大壺の編年を検討する。時期決定で重要な遺構は、福岡県糸島市の三雲・井原（みくも・いわら）遺跡の 2 号甕棺（第 7～9 図 3、4）である。この甕棺は上甕（3）と下甕（4）で型式が異なるが、このような現象は本県の北岡金比羅祀遺跡の成人用大形甕棺にも見られるので、決して珍しい現象ではない。三雲・井原遺跡の 2 号甕棺の時期は後期中頃といわれているが、型式組列から見て下甕（4）が同時期と考えられる。よって 2 号甕棺の下甕に先行する長胴で胴部最大径の位置が高いＡ群（第 9 図 5、9、10）と長胴で胴部最大径が中位のＣ群（同 2、8）は弥生後期前葉に位置付けられる。後続する第 9 図 1 は後期後葉に、同 6 は後期終末に位置付けられる。同 7 は弥生中期末とされる。

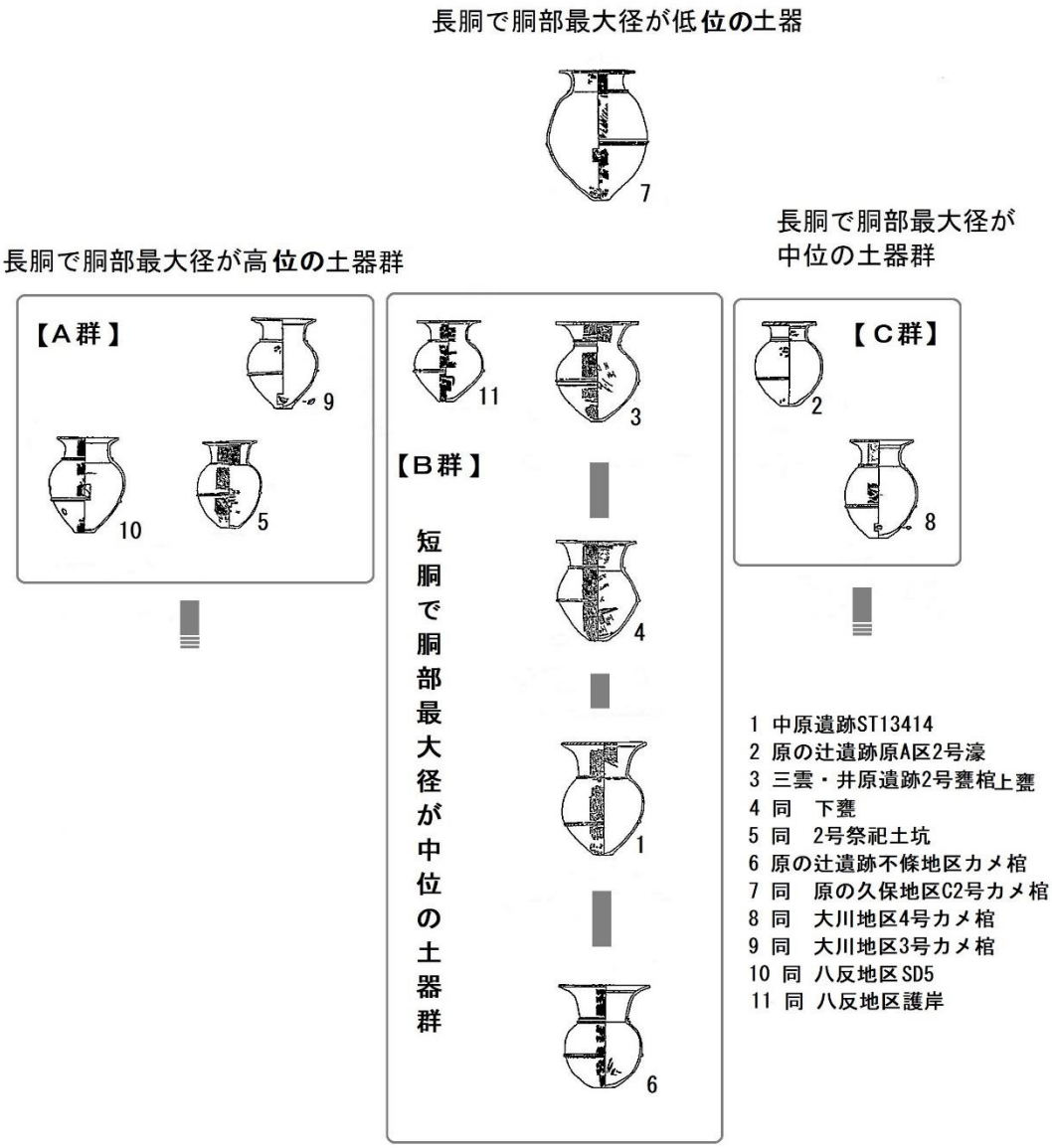
以上の糸島系大壺の編年を里田原遺跡のカメ棺に適用してみる。同遺跡の第 1 号カメ棺下甕（第 4 図 4）の扁平率は 90.2、口頸部率は推定で 30 前後、胴部最大径の位置は推定 60 前後でこれらの指数は第 7～9 図の 1 に近い。同上甕（第 4 図 5）は扁平率 103.3、口頸部率は推定で 30 前後、胴部最大径の位置は推定 58 前後である。一方第 2 号カメ棺（第 4 図 6）の扁平率は 93.3、口頸部率は推定で 31 前後、胴部最大径の位置は 60 で、いずれの土器も第 7～9 図の 1 に近い。したがって里田原遺跡のカメ棺の時期は弥生後期後葉に比定できよう。

６　糸島系大壺の分布

糸島系大壺の分布に関して宮﨑は具体的な記述をしていないが、同大壺の出土遺跡として壱岐市原の辻遺跡、福岡市西区今宿五郎江遺跡、糸島市三雲遺跡、唐津市中原遺跡、平戸市長畑馬場遺跡、同市里田原遺跡、松浦市太田遺跡、佐世保市門前遺跡を列記している。寺田は同大壺の分布を「長崎県では壱岐市・平戸市田平町そして松浦市御厨町と、県北部の沿岸域と壱岐島に限る範囲であり、それ以南には確認されない。佐賀県は唐津市域の沿岸域、福岡県では糸島市及び福岡市西区までであり、佐賀県南部や福岡県南東部には確認されていない。全体的に出土例が少ない形状の土器ではあるものの、出土する範囲が限られることは間違いなくこの地域を特徴する遺物の一つと判断できる。」と明快に述べている（寺田 2020 p21）。

７　糸島系大壺の機能

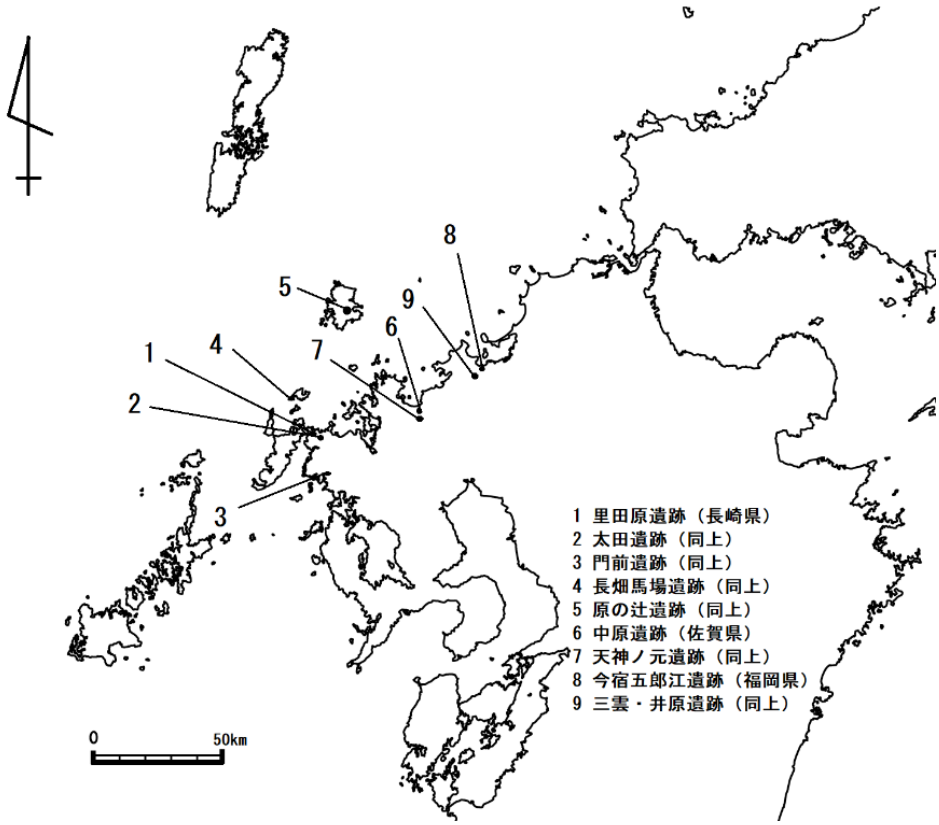
ここでは糸島系大壺が当時どのように使用されたかという問題について検討する。宮﨑は原の辻遺跡の出土例から「小形品・中形品はもともとの壺のもつ機能である貯蔵形態として製作されて小児・幼児用のカメ棺に転用されたものであり、大形品だけが貯蔵用壺を拡大したかたちで、カメ棺



第９図　糸島系大壺の型式組列（S=1/40）

専用棺として製作された可能性がある。」（宮﨑 2022　p27）と述べて、糸島系大壺の機能は一般の壺形土器と変わらないと考える。

一方、寺田は「出土する遺構については甕棺や祭祀土坑であり、日常容器ではなく特殊な土器であることは明確である。」（寺田 2020　p 22）として、非日常的土器との見方をしている。このように両者の見解は大きく異なっている。宮﨑の教示によると今のところ住居跡などからの出土はないとのことで、今少し甕棺や祭祀遺構以外からの出土事例を集成する必要があろう。



第 10 図　糸島系大壺の分布（S=1/250,000）

８　糸島系大壺の歴史的評価

これまで宮﨑が提唱した糸島系大壺を同氏と寺田氏の論攷を参考にしながら検討してきたが、最後に両氏が同大壺を歴史的にどのように評価しているかを見ておきたい。

宮﨑は糸島系大壺が糸島地域で製作され、玄界灘沿岸の海民が米などの物資を収納した運搬具として用い、それがカメ棺などに転用されていたと考える。したがって同大壺の分布に玄界灘沿岸の海民の動向を重ね合わせて評価しようとしている。

一方、寺田は同大壺を非日常的土器と理解し、墓地や祭祀遺構など居住域とは異なる信仰の対象となる特別な地域で用いられたと評価している。

先の機能論と同様に両者の糸島系大壺の歴史的評価は異なっており、前述のように集落や住居跡などからの出土状況をさらに検討する必要がある。

おわりに

以上述べてきたように糸島系大壺は、弥生時代後期に一連の型式変化のもと、西北九州や北部九州の沿岸部に限定して分布する土器形式であったと判明した。したがって製作地と考えられる糸島地方の名を冠した同一系統の土器として認識を共有することはきわめて合理的であると結論づけたい。

なお本稿の副題を「平戸市里田原遺跡の通称「荻の下地区弥生墓地」のカメ棺に寄せて」とした

のは同遺跡の重要性と歴史的価値の大きさを筆者自身がさらに理解し、認識を深めたいとの想いからである。本稿の前半では遺跡の現状を嘆いたが、当時の調査担当者や行政のみが、今の里田原遺跡の現状を作り出した原因者であると断じることはできまい。地元や県内の研究者がどれほど里田原遺跡のことを知り、理解し、評価しているか。そこが今まさに問われていると考える。

本稿を執筆するにあたっては、寺田正剛、宮崎貴夫、渡邊康行の各氏からご教示を賜った。さらに平戸市文化交流課　塩塚浩一氏からは有益な情報提供を受けた。
また長崎県埋蔵文化財センター調査課島原分室の濱村一成、同センター東アジア考古学研究室の中野真澄、林田卓也の各氏には文献探索で大変お世話になった。文末ながら芳名を記し感謝申し上げる。

（令和５年３月 13 日脱稿）」

【註】

註１　カメ棺は本来「土器棺」と呼ぶべきと考えるが、本稿では 2003 年に田平町教育委員化が刊行した萩の下地区弥生墓地の発掘調査報告書に準じた。

註２　12 面の内訳は長崎県平戸市里田原遺跡、同県壱岐市原の辻遺跡、福岡県福岡市早良区の吉武高木遺跡、同県小郡市小郡若山遺跡（1 号）、同（2 号）、佐賀県唐津市宇木汲田遺跡、同県佐賀市増田遺跡、同市本村籠遺跡、山口県下関市梶栗浜遺跡、奈良県御所市名柄遺跡、大阪府柏原市大県遺跡、長野県更埴市社宮司遺跡である（辻田 2019）

註３　単に史跡と呼ぶ場合は国史跡を指す。現在、里田原遺跡は県指定史跡であるが 40ha（40 万㎡）と言われる水田地帯のうちの、わずか 941 ㎡に過ぎない。

【引用・参考文献】

糸島市教委編 2013『三雲・井原遺跡Ⅷ－総集編－』糸島市文化財調査報告書第 10 集　糸島市教育委員会
田平町教育委員会編 2003『里田原遺跡』国営再編整備事業にかかる第 37・40・41・44・46 次発掘調査の報告　田平町文化財調査報告書第 9 集　田平町教育委員会
辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』株式会社 KADOKAWA　角川選書
寺田正剛 2020「「松浦市太田遺跡の円形浮文のある大型壺について」長崎県埋蔵文化財センター紀要　第 10 号　長崎県埋蔵文化財センター
藤尾慎一郎 1993「考古学における「かたち」の認識」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 53 集国立歴史民俗博物館
前原市教委編 2006『三雲・井原遺跡』県道瑞梅寺池田線拡幅工事に伴う文化財調査報告書　前原市文化財調査報告書第 92 集　前原市教育委員会
宮崎貴夫 2022「在地壺と搬入された甕棺・大甕・大壺の検討－弥生時代後期の長崎県本土地域を中心として－」『西海考古 』第 12 号　西海考古同人会

【第 7～9 図掲載土器の出典】

1　中原遺跡　ST13414　佐賀県教育委員会編 2012『中原遺跡Ⅵ』西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（11）佐賀県文化財調査報告書第 193 集 P. 102 №2
2　八反地区護岸　原の辻遺跡調査事務所編 1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅰ　原の辻遺跡調査事務所調査報告書第 11 集　長崎県教育委員会　P. 140 №14

3 三雲・井原遺跡2号甕棺上甕　前原市教委編2006『三雲・井原遺跡』県道瑞梅寺池田線拡幅工事に伴う文化財調査報告書　前原市文化財調査報告書第92集　前原市教育委員会　P.71第81図

4 同　下甕　同上

5 同2号祭祀土坑　同P.114第124図

6 不條地区カメ棺　原の辻遺跡調査事務所編2005『原の辻遺跡』主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書② 原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集　長崎県教育委員会　P.91 No2

7 原の久保C2号カメ棺　原の辻遺跡調査事務所編2009『原の辻遺跡』主要地方道勝本石田線道 改良工事に伴う緊急発掘調査報告書⑥　原の辻遺跡調査事務所調査報告書第39集　長崎県教育委員会　P.61 No4

8 大川地区4号カメ棺　原の辻遺跡調査事務所編1999『原の辻遺跡』原の辻遺跡発掘調査事業に係る範囲確認調査報告書Ⅰ　原の辻遺跡調査事務所調査報告書第11集　長崎県教育委員会　P.34 K4

9 大川地区3号カメ棺　同上　P.34 K3

10 八反地区SD5　原の辻遺跡保存等協議会編 『原の辻遺跡』長崎県緊急雇用対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書原の辻遺跡保存等協議会調査報告書第3集　原の辻遺跡保存等協議会　P.26 No44

11 八反地区護岸　原の辻遺跡調査事務所編2005『原の辻遺跡』主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告書②　原の辻遺跡調査事務所調査報告書第29集　長崎県教育委員会　P.67 No2